





西郷隆盛  
(1827～77年)  
(西郷南洲頭顕彰館蔵)

## 激動の年、戦争のさなかでも 講義はいつも通りに

命名後わずか数カ月で年号が変わるほどに、幕藩体制から王政維新へと政治の大転換の年にあっても、福澤の学問への情熱は、首尾一貫してびくとも揺るがなかった。移転直後の5月には、江戸城の開城を不満とする一部の旧幕臣が上野の山に立てこもり、官軍が攻撃を開始。その銃声が開こえ、市中は俄然騒然とするなか、福澤は毎週土曜日に開講されていた経済書の講義を悠然と続けた。世の中がどうあれ、学問教育を尊重する姿勢を塾生に伝えたこのエピソードをもとに、義塾では5月15日を「福澤先生ウエーランド経済書講述記念日」とし、毎年三田演説館で記念講演会が行われている。

のちに福澤は『福翁自伝』で当時



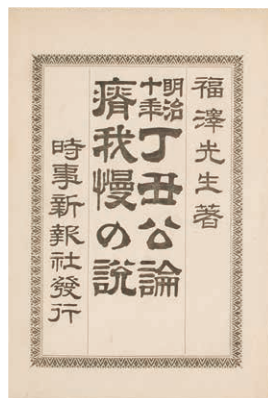
「福澤論吉ウエーランド講述の図」  
安田敦彦画

のことを「上野に大戦争が始まって、その前後は江戸市中の芝居も寄席も見世物も料理茶屋もみな休んでしまつて、八百八町は真の闇、何が何やらわからないほどの混乱」と語っているのだが、そんなことより、講義のほうが大切だったのだ。

## 西郷隆盛の「抵抗の精神」を高く評価していた

ところで、明治維新の立役者といわれる西郷隆盛と福澤論吉は、面識はなかったものの、お互いを高く評価していたことを知っているだろうか。

「西郷の死は憐れむべし。之を死地に陥れたるものは政府なり」  
福澤が1877（明治10）年、西南戦争直後に書いた『丁丑公論』の一文である。福澤は、西郷の人格・思想を、士族の気風や「文明の精神」を持つものとして高く評価し、西南戦争の決起を専制政治に「抵抗する精神」によるものと強く弁護している。そして士族を貧窮に追い込んだ明治政府にこそ、反乱勃発の責任があると指摘し、西郷を死なせたのは明治政府であるとまで言っている。



『明治十年丁丑公論・瘠我慢の説』

教育者、軍人の違いはあれど、西郷の生き方に感じるものがあつたのだろう。ただし、時事新報の記者が埋もれていた同文書を福澤宅で見出し、公表したのは1901（明治34）年の福澤病没の直前である。書いたものの、これを西南戦争直後に発表するには、影響が大きすぎると判断したのだろうか。

一方、西郷は、福澤の著作を愛読していたことが知られており、郷里鹿児島に慶應義塾への入学を促したり、弟子に『文明論之概略』を読むように勧めたりしていた。福澤の思想に共感するものがあつたのだと思われる。

教育者・思想家の福澤論吉、政治家・軍人の西郷隆盛。立場は違えど、動乱の幕末から明治を、自らの信念を譲ることなく貫き通した2人には、相通じる強い意志を感じる。